

中学校外国語

1 中学校外国語科の指導と評価について

(1) 学習指導要領の考え方

- ① 新学習指導要領では、全ての教科等の目標について、①育成することを目指す資質・能力（何ができるようになるか）と、②教科等の特質に応じた学習過程（どのように学ぶか）を明示。
- ② 各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現
「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」
- ③ 外国語科の目標

第2章第1節 外国語科の目標
外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

④ 育成を目指す資質・能力の三つの柱

- (1) 外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。
- (2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。
- (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

⑤ 小・中の外国語教育の円滑な接続と中学校における新課程への対応

ア 小学校で「音声」のやりとりや「文字」に慣れ親しむ学習を行ってきた児童が中学校へ入学する。また、小学校での総学習量・内容が異なる児童が入学（2024年度まで毎年度）することを意識して指導する。

イ 中学校では、新課程への計画的な対応が必要である（2021年度の中2～3年生）。

⑥ 評価の基本構造

学習指導要領の目標及び内容…資質・能力の三つの柱で再整理されている。

- ・ 各教科における観点別学習状況の評価の観点…「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理
- ・ 「学習評価の在り方ハンドブック（国立教育政策研究所）」の再確認が必要

⑦ 小中連携

- ・ 小学校との連携に取り組んでいる中学校は、未だ全学校に至っていない。地域によって大きな差がある現状。
- ・ 「指導の系統性の確保」を大事にすることが必要。切れ目のない指導こそが実質的な連携である。

(2) 指導と評価の実際

① 「CAN-DO リスト形式」の学習到達目標の設定状況

- ・ 「外国語を使って何ができるようになるか」という観点（「CAN-DO リスト形式」）により学習到達目標を設定している学校の割合は9割を超えているが、「CAN-DO リスト形式」で学習到達目標の達成状況を把握している学校は5割程度となっており、学習到達目標を形骸化させることなく、活用することが課題。

② 指導と評価の一体化のための対応

ア 「学習到達目標と評価」とのつながりを意識すること。学期末に行っている評価は、学習到達目標の評価（一部途中段階の評価）であることを認識すること。

- イ 学習到達目標を踏まえた上で、それぞれの目標を設定すること
＜具体例＞

「話すこと [やり取り]」
第3学年の目標
日常的な話題や社会的な話題に関して、聞いたり、読んだりしたことについて事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて伝え合うことができる。

単元の目標
友達の意見等を踏まえた自分の考えや感想をまとめるために、野菜の歴史について書かれた英文を読み、読んだことなどを基に考えたことや感じたことなどを、英文を引用するなどしながら伝え合うことができる。

「読むこと」
第3学年の目標
ある程度の長さの物語を読んで、登場人物の行動や話の流れなど、あらすじを読み取ることができる。

単元の目標
時間軸に沿って、物語のあらすじを読み取る。

- ウ 学習到達目標と指導と評価を一体化すること
- ・ まずは、目標や指導と一体化された指導のイメージをもつことが大切である。
 - ・ 言語活動は、知識・技能を活用して、思考力・判断力・表現力を高めるために取り組ませるものである。情報そのものを整理し、考えようと再構築することが必要である。

2 小学校外国語科における1人1台端末の活用について

(1) 学習指導要領とGIGAスクール構想の関係

学習指導要領（前文）
これからの学校には（略）一人一人の児童（生徒）が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる

- ・ 「主体的・対話的で深い学び」「個別最適な学び」「GIGAスクール構想・1人1台端末・ネットワーク」という一連の流れがある。

(2) StuDX Styleの活用

- ① 1人1台端末・ネットワーク環境の積極的な活用の促進
- ② 「すぐにでも」「どの教科でも」「誰でも」生かせる1人1台端末の活用方法に関する事例及び本格始動に向けた対応事例などを情報発信・共有

(3) nextchannel (Youtube) の活用

個人、校内の研修での活用ができる動画を配信

3 参考となる資料等について

- (1) 中学校学習指導要領解説 外国語編（文部科学省 平成30年3月）
- (2) 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校外国語
（国立教育政策研究所教育課程研究センター 令和2年3月）